

幸田露伴「土偶木偶」と「太郎坊」における モノ・過去・前世

道合裕基

はじめに

幸田露伴（1867-1947）に「土偶木偶」（1905）という作品がある。『日本』に9月1日から10月27日まで連載され、「十九」以降を書き加えて『潮待ち草』に「附録」として収録されたものである。この物語では、主人公・卜川玄一郎が、旅先の古道具屋で見つけた文殻を購入したことで、不思議な体験をすることになる¹⁾。「土偶木偶」については、材源と思しき『情史』などの中国古典との詳細な分析が発表されている（須田2006）²⁾。そのため、材源に関しては、管見の限り論じ尽くされた感がある。

一方、露伴は、「太郎坊」（1900）という短篇を残している。「太郎坊」は、1900年7月『新小説』に発表された。主人が、愛用していた猪口をうっかり割ったことがきっかけとなり、主人の口から過去の出来事が細君に語られるのである。「太郎坊」は、先行研究があまりないが、掲載紙の特集との関係を考察したものや、本稿とも関わる恋愛の記憶の現前・潰えに注目した論などがある³⁾。

この二つの物語には、重要な役割を果たすモノが登場する。「土偶木偶」では文殻であり、「太郎坊」においては猪口である。それぞれの物語で、これらのモノは、前世の出来事や過去を想起させる。本稿では、「土偶木偶」と「太郎坊」におけるモノに着目し、人類学でのモノについての議論を参照し、物語全体での位置付けを考察することを目的とする。

1. 「土偶木偶」におけるモノと前世

1.1. 呪物としての位置付け

「土偶木偶」では、卜川が不思議な体験の後、前世で深い関係にあった女性の生まれ変わりである女性と結婚する。つまり、卜川の結婚に至るまでの物語だが、そのきっかけが、文殻を入手したことによる。この文殻は、卜川の前世を顕現させるのである。その点で文殻は、一種の呪物としての意味をもつ。次に引用するのは、「土偶木偶」において、卜川が、古道具屋で、文殻を見つけた場面である。

店のそのまなかまなかに当りて宙に吊り下げられたるよこものよこもの茶室掛ちゃがけほどなるが、中はとにかく表装は
女物のながじゅばんながじゅばんなど用いたりとおぼしく、紅べにやら縹はなだ色みどりやら緑色いろいろやらの種々の色のちらちら見

えて疑いも無き友禪染の、^{ゆうぜんぞめ} 疇昔思われて艶に^{むかし} 艶かしきが、^{えん} 幾日店晒しにせられて^{なまめ} 道路の^{たなざら} 塵埃に古され果てし今日ぞや、^{みち} 夕暮れ淋しく^{ほこり} 闇逼る今渡る秋風の煽りに、ぶらありぶらありと吹き動かされて^{きょう} 懶げに廻りおれるを見て、何と無く云い知らぬ哀れさをおぼえ、引き付けらるるが如くその店に近付きぬ。
(「土偶木偶」 p. 121)

あるモノを入手したことによって、奇妙な体験をするという物語として、テオフィル・ゴーチェ (1811-1872) の「ミイラの足」(1840) などが想起される。「土偶木偶」において、その役割を果たすのは、文殻である。しかも、単なる手紙ではなく、死を覚悟した上で書かれたものである。この呪具としての文殻については、次のように外装などが表現されている。

浮世絵の^{うきよえ} 袷装には色^{ひょうそう} 絲美しき^{いろいと} 刺繡帛など、^{ぬひとりぎれ} ややもすれば用ゐらるる^{ならひ} 習なれども、近づいて見れば是は如何な事、それにはあらで、^こ 画に^い ならず歌に^か ならず俳諧に^{はいかい} ならずして、理由は何か知らねど細々と^{こまこま} 書きたる文殻とはただ^{ひとめ} 一目に^{おんなふで} 知れ渡りぬ。女筆のしどろもどろと何を書きけるとぞと猶よく見るに、書出しの^{ことば} 詞もなければ^{むすび} 結尾の芽^{めでたく} 出度かしくも無く、もとより我が名人の名も無くして、^{まさ} 正しく^{ふみ} 長き^{あとさきう} 文の後前失せたるものなり。
(「土偶木偶」 p. 122)

文学作品に登場する手紙は、単に用件や個人の感情を書き綴ったものではない。手紙は、伝達のための道具としての位置付けだけではなく、「異界」との接触、交流を可能にする。これは、差出人と受け取り手のあいだを行き来し、情報なりを伝達し、離れた二つの地点をつなぐからである。そのため、ゴシック小説などの小道具として手紙が多用される。例えば、夢野久作 (1889-1936) の「瓶詰の地獄」(1928) や、メアリー・シェリー (1797-1851) の『フランケンシュタイン』(1818) での極地にあるウォルトンからイングランドにいる姉に送られる手紙などが相当しよう。

「土偶木偶」では、手紙(文殻)のもつ「異界」性を強調するかのよう、文殻を手にとって読む際に、次のように鐘の音が鳴っている。

逢魔が時は今ぞと告ぐる^{みいでら} 三井寺の^{かね} 洪鐘の音、^ね 大湖の^{たいこ} 氣に響きて深きに潜める^き 竜王を覚ますかと^{すさま} 凄じく、たちまちにごーんと起って空に浪なして響きぬ。
(「土偶木偶」 p. 123)

引用場面での鐘の音は、時を告げるためのものであるとともに、「異界」の存在が訪れる合図ともみなせるだろう。民俗学では、幽霊などの「異界」の存在が出現する際に、音を伴って現れることが報告されており、駄洒落のような「音連れ」という語をもって表現される⁴⁾。「土偶木偶」で、文殻を読む際に鐘の音が鳴るのは、卜川が奇妙な体験をすることを告げる音と言えるだろう。

結局卜川は、目を通した後、文殻を購入し、宿屋で熟読するうちに、書かれている内容を理解し、想い人と一緒になれないがゆえに自死した女の境遇に思いを馳せて涙を流している。

幾度と無く読む中そぞろに心を奪られて、秋の夜のやや更け行き、隣室の人の鼾声微に、
 楼下の物洗う音、談話声などもおのずと止む時、凝然とその女の上を思い遣れる余り、卜川
 我知らず涙をさえ催しけるが、(後略) (「土偶木偶」p. 130)

卜川が、手紙の内容に感じ入ることからは、書き手の女との宿縁を予感させる。また、ここでは、手紙の書き手が、すでに死者となっていることも「異界」性を強調していると言えるだろう。このように卜川は、文殻に出会い、不思議な出来事を体験するのである。

手紙の帯びる「異界」性に加えて、卜川が文殻と出会った古道具屋という場所もまた「異界」性を帯びる。古道具屋には、統一性なく多様なモノが集積される。しかし、それら古道具屋に集められたモノには、経過した時間が刻まれているという共通点が見出せる。そのため古道具屋は、過ぎ去った時間が、モノという形で集積された場ということが出来る⁵⁾。

「土偶木偶」で登場する古道具屋の主人は、とにかく文殻が売れば良いと考える俗物そのものであるが、卜川に奇妙な体験をさせるきっかけとなる文殻があった場所という点では、「異界」性を帯びた場と言えるかもしれない。

「土偶木偶」において、卜川が文殻に出会うことで、前世の出来事に付随する奇妙な体験をすることになる。それがゆえに文殻は、呪具としての役割を果たしていたと言えるだろう。

1.2. 卜川の置かれた状態

卜川が奇妙な体験をしたのは、直接は文殻に出会ったことに起因するが、それに加えて卜川の置かれた状態もまた「異界」との接触を可能にする要因として考えられる。「土偶木偶」の物語中では、卜川は、旅の途上にある。言うまでもなく、旅は、それまで住み慣れた土地を離れ、見知らぬ土地へと移動するものである。民俗学的には、定住と漂泊の二項対立、日常—非日常の二項対立がセットになって語られる⁶⁾。漂泊の状態にある者は、他所者ゆえに一種の非日常性を帯びるのである。そのため、漂泊の状態にある卜川は、一種の異人性を帯びるのである。

だが、正確に言えば、卜川は、旅の前からも住み慣れた土地に親しんでいる訳ではない。「日ごろ偏屈の友無し妻無し思う人無し」(p. 118)とあるように、卜川は、周縁性、ないしは境界性をすでに帯びているのである。このことは、汽車の中で乗り合わせた乗客達と口を利かず、愛想なく一人沈思している様子からも窺えよう。「すべて人とは心の行き方の違う」(p. 120)とあるように、卜川の異人性は旅の途上にあることで、ますます強調されるのである。

卜川は、異人性を帯びていたが、宿泊先で火事に遭い、荷物一式を焼失している。この事件に遭遇したことで、ただでさえ異人性を帯びていた卜川の異人性は強固なものとなる。文殻以外を除く身一つになったことで、住み慣れた場所からの離脱に加えて、卜川の存在に揺さぶりを与える。

手荷物は焼く、財囊は亡くす、重荷に小付の帽子まで置いて来て、着のみ着のまま風呂敷一つ持たず、有って益無き怪しき掛物ばかりを、彼時手にしたりしまま今に持ち居て、尺八な

らば^{おこも}乞丐になりかかりの折柄、(後略)

(「土偶木偶」p. 132)

卜川は、旅立ちの前に家財を大体処分しているが、さらに火災によって文殻だけが手元に残り、途方に暮れている。住んでいた土地での周縁性、旅の途上であること、所有物の喪失といった条件が重なることで、卜川と「異界」との距離はより縮められるのである。

「土偶木偶」での「異界」との接触の直接のきっかけは、文殻を入手したことであるが、卜川の帯びた異人性も接触を可能にしている要素の一つと言えるだろう。

1.3. 過ぎ去った時間・空間

「土偶木偶」では、長い時間が経過し、転生が行われている。卜川は、前世の記憶を忘却していたが、文殻に出会ったことで、前世での恋人であるお照と再会したのである。ここでは時がただ無為に流れた訳ではない。時間の経過は、結ばれなかった二人を結び付けるために必要だったのである。その前世からの縁を証明するのが、お照によって示される無名指の黒子である。

私の左の^{くすりゆび}無名指の指輪の下に当たるところに、小さな^{ほくろ}黒子が一つ御座いますが、指に黒子の有ることは少いものと云います、もしも私が生れ代ったならこの指の^{こゝ}此処にこのしるしを持って、きっとあなたの御眼にかかりましょう (「土偶木偶」p. 161)

この黒子は、卜川が目覚めた後に会った農家の娘の無名指に見出されることになる。次に引用するのは、卜川が黒子を認めた場面である。

^{ひだ}左りの^{くすりゆび}無名指に所も所、色も色、寸分違わぬ^{たが}黒子^{ほくろ}一つ、ありありと昨夜の女の指に見しが如く^{きげん}に有り。卜川愕然と^{おび}魔えて、殆ど倒れんとせしが^{から}辛くも自ら支えて (後略)

(「土偶木偶」p. 163)

娘の黒子を認めたがゆえに、卜川は、前世の縁を信じるのである。

過去と現在の時間の連続性を卜川は実感するが、時間の経過に加えて、「土偶木偶」では空間の移動が描かれる。登場人物の空間の移動は、「土偶木偶」に限るものではなく、どの物語でも行われるものである。だが、卜川による空間の移動は、当初は、旅であったものが、前世の世界を体験するための道行きとなる。それは、前述の文殻との出会いや、卜川の置かれた境遇に加えて、闇の中を足の裏の感覚を頼りに京都を目指すという設定ゆえに、「異界」へと足を踏み入れるのである⁷⁾。

人の声無く、火の光無く、虫の^ね音も無く、鳥の身じろぎも聞えず、^{めいど}冥土にありと聞ける^{こくあん}黒闇^{どう}道というももしくはこんな所かと思いやられて、ただ両脚の^{うら}裏面の^{おぼえ}感覚ばかりに、雲の中を

歩けるでも無ければ他の世界の中を歩けるも無く、(後略) (「土偶木偶」p. 134)

闇の中をひたすら歩いて行く卜川は、助けたお照に招かれ、不思議な少年のいる家へと至る。この案内された家は、前世の自分が住んでいた家であると卜川は気づくが、一種の「異界」と解せるだろう。これは、民俗学において「闇」が「黄泉」などと語源を同じくし、「異界」との関連が指摘されていることから、卜川が闇の中を進むということは、単なる空間的移動ではなく「異界」に接近していると言えるのである⁸⁾。

訪れた家の「異界」性は、風呂の湯が温いことや、食事に火の気がないこと、「十四か十五の」少年しかいないことなどからも察せられる。卜川は、目覚めることで「異界」から現世に戻ってくるが、「土偶木偶」は、過去——現在という時間、および地理的・空間的な移動、「異界」からの往還が、物語の重要なモチーフになっていると言えるだろう。

1.4. 卜川の結婚

卜川は、目覚めた後に一人の農家の娘に出会う。この娘は、口と耳が不自由であるが、お照が転生の証拠であると語った無名指に黒子がある。この黒子があったために、女の生まれ変わりだとし、この娘と結婚する。黒子の存在は、偶然か否かは別にして、卜川は良い家庭を築いたということが出来るだろう。次に引用するのは、「土偶木偶の後に書す」の一節である。

卜川玄一旅中に唾美人^{りょちゆう あびじん}を得て妻とし、また帰って東京に住み、君平枋得^{くんべいほうとく}を学んで生を営みしが、今を距る三年、一日忽然として夫妻相伴ないて家を捨て、終にその往く所を知らず。

(「土偶木偶」p. 164)

引用に続いて卜川の妻が、「慧巧伶俐、農家の出に似ず」(p. 185)とあるように、障害も緩和され、出来た妻であることが示される。こうして前世で結ばれることのなかった二人が結ばれ、良い夫婦となったのである。

文殻に出会ったことは、単に不思議な体験をするきっかけとしてだけではなく、現世における妻となるべき人と出会うきっかけでもあった。つまり文殻の入手が、伴侶の獲得へとつながっているのである。

1.5. モノと伝承・伝達

「土偶木偶」での「異界」との接触は、卜川が文殻を読んだことによる。しかし、この物語の背景にあるのは、声による伝達である。卜川は、文字である文殻を目にしている。この文殻は、公文書などの「大きな歴史」ではなく、個人の「歴史」を記録したものである。手紙が装丁されて現在の卜川の手に渡り、記された思いが消えることなく伝達されたのである。

一方、文殻に記された文字による伝達とは別に、卜川の逸話は、声(口承)によって伝達され

ている。次に引用するのは、「土偶木偶の後に記す」の一節である。

玄一の談、予はこれを鹿谷三郎ししたにさぶろうに聞蹴り。三郎はこれを根井守正ねいもりまさに聞き、守正はこれを河島かわしま民子たみこに得、民子はこれを藤沼時雄ふじぬまときおに得、時雄は屋を玄一おくに祖貸し、直ただちにこれを玄一に聞きたりという。 (「土偶木偶」p. 165)

ここでは、また聞きに次ぐまた聞きで、「土偶木偶」の物語が「予」に伝えられたことが示されている。この物語の真偽は、何人かの人物をあいだに挟むことで曖昧になるが、「予」に直接語った鹿谷三郎が、「好んで怪を談ず」人物であり、卜川の逸話は、鹿谷の語った怪異の中で「最も平凡なもの」であるというように内容の保障がなされる。

「土偶木偶」では、文殻による書承と、世間話という口承の二つの伝達形式が描かれていた。二つの伝達形式の採用は、口承による世間話の不確実性を、書承（文殻）という証拠となるモノを登場させることで、語られる物語内容に真実味を付与しているとも言えよう。このように、「土偶木偶」では、文殻が重要な役割を果たしているのである。

これまで「土偶木偶」における文殻の役割について概観してきたが、では、「太郎坊」においては、モノと過去の関わりはどのように描かれているだろうか。次章では、「太郎坊」における猪口についての考察に移りたい。

2. 「太郎坊」におけるモノに付随する過去

2.1. 人格・記憶と結び付いたモノ

「太郎坊」では、愛用の猪口の破碎に伴い、主人の口から、かつて結婚を考えて交際していた女性について語られる。このような過去を聞かされる細君としては、いささか引っかかる場所がありそうだが、出来た細君は淡々と聞いている。

この物語で重要な役割を担うのは猪口である。当該の猪口は、堇の絵が描かれており、女性の取りなしにより、女性の父親から譲られたものである（「太郎坊」とは、堇の異称である）。そのため、猪口は〈贈与物〉ということが出来る。〈贈与〉については、経済人類学の重要なトピックであり、この概念は、教育学など他の分野でも援用されている⁹⁾。

「太郎坊」での猪口は、言うまでも無く、金銭を媒介にして入手されたものではない。交換とも異なり、互酬性の原則からも対応するモノの移動は行われない。その意味で、猪口の〈贈与〉は、純粹贈与と言えるだろう。

〈贈与物〉には、商品や交換物とは異なり、贈与者の人格が付加されているのである。この場合は、女性の父親が贈与者に相当し、ひいては、婚姻という娘の〈贈与〉をも想定していたと言えるだろう。だが、結局はモノの〈贈与〉だけに止まり、レヴィ＝ストロース的な「家」、もし

くは共同体による女性の〈贈与〉は行われぬ。それは、破談になったからに他ならないが、猪口には、贈与者の人格が刻印されており、ひいては、彼の娘である女性の思い出も付随しているのである。次に引用するのは、主人が、代わりに出された猪口についての台詞である。

「ウム、しかしこの猪口は買ったのだ。去年の暮におれが仲通の骨董店で見つけて来たのだが、あの猪口は金銭で買ったものじゃあないのだ。」（「太郎坊」p. 259-260）

主人の台詞からは、〈贈与物〉であるがゆえの価値、ひいては、贈与者についての記憶との関係が垣間見られる。つまり、「太郎坊」での破碎された猪口は、過去の記憶と密接に結び付いているのである。モノと記憶の関係について、文化人類学者の小田亮氏は、オーストラリア・アボリジニのチュリングが「歴史」を表象することに言及している（小田 1994）。チュリングは、絵や文様の描かれた木や石で製作された長円形の祭祀具である。チュリングは、「歴史」自体ではないが、「歴史」語りとセットになって、語られる「歴史」の内容を補助するのである。無文字社会・未開社会において「歴史」とは、主に口承による記憶を指す。「土偶木偶」の主人の語りは、生活している時代も環境も異なるが、個人の「歴史」の語りや、モノによってその内容を補助されるという点では、類似性が見出せるのである。

また、近年モノをめぐる人類学の議論では、「リマインダー」の概念が注目されている。「リマインダー」は、個人の記憶を想起させるモノのことで、部屋に飾られている写真や、アルバムなどが相当する。現在では、その意味が拡大され、観光人類学では、現地での〈みやげもの〉が包含されている（橋本 2011）。

「太郎坊」では、猪口が、〈贈与〉物であり、「リマインダー」としての性格を帯びると言えよう。主人が、猪口を割ったことで、過去の出来事が記憶から失われる訳ではないが、記憶と密接に結び付いたモノが失われることは、象徴的と言えるだろう。過ぎ去った過去を形象化している猪口の喪失によって、主人の口から妻への語りとして、過去の出来事が伝達されねばならなかったのであろう。次に引用するのは、「太郎坊」での猪口が割れた場面である。

主人の手はやや顫えて徳利の口へカチンと当たったが、いかなる機会か、猪口は主人の手をスリと脱けて縁に落ちた。はっと思うたが及ばない、見れば猪口は一つ跳つて下の靴脱の石の上に打付て、大片は三ツ四ツ小片のは無数に砕けてしまった。（「太郎坊」p. 257）

大切な猪口の喪失をきっかけにして、主人は、自らの過去を妻へと伝達するに至るのである。

また、この物語で過去・記憶を形象化するモノが、猪口と設定されているのも示唆的である。猪口は、単に酒を飲むという用途だけではなく、婚姻や契約を行う際の道具としても機能する（神崎 2008）。物語中で、主人が、「太郎坊」と対となる「次郎坊」の喪失に際して、女性との関係も「離ればなれになるような悲しい目を見るのではあるまいか」（p. 263）と語るように、結

局結婚に至ることがない予兆と捉えることが出来るだろう。

以上のように、「太郎坊」では、〈贈与〉物である猪口が、過去・記憶を喚起させる「リマインダー」として機能していると言えるのである。

2.2. 堇の意味するもの

「太郎坊」では、贈られた猪口には堇花が描かれている。なぜ、タイトルに示されるような堇の絵が描かれた猪口だったのだろうか。堇が選ばれているのには、何らかの理由があるとは容易に推察される。

堇は、古くは、『万葉集』（成立年不詳、759年以後）に登場し、有名な山部赤人（生没年不詳）の歌「春の野に すみれ摘みにと 来し吾そ 野を懐かしみ 一夜寝にける」（巻八 一四二四）にも詠まれている。この時代の堇は、花を觀賞するためのものでなく、食用・薬用、染料であったという¹⁰⁾。

露伴は、「遊仙窟」（1907）で、唐代の伝奇小説『遊仙窟』（成立年不詳）が、『万葉集』へ与えた影響を論じていることから、当然、赤人の歌も知っていたと思われる¹¹⁾。赤人の歌は、堇を摘みに来たが、その美しさに心惹かれて、一夜を過ごしてしまったと一般的に解される。

しかし、赤人の歌の解釈をめぐることは、堇を摘みに行くという行為は、思い人の「魂振りの行為」であり、その復活のために野に宿る必要があったのではないか、という説もある（白川2002）。白川の説に従うならば、「太郎坊」で、猪口に堇が描かれていることは、主人が別れることになった女性への追憶、再会を密かに願っていることを示唆しているのかもしれない。

また、花の美しさから「すみれ」は、女性の名に使用されるように、主人が別れることになった女性の美しさとも重ねられているのであろう。現に、犬養孝は、堇を、「女性の隠喩」とも読めると指摘している（犬養1993）。このように、「太郎坊」では、堇という植物のイメージを巧みに織り込んでいると考えられる¹²⁾。

2.3. 過ぎ去った時間

「太郎坊」で過ぎ去った時間は、「土偶木偶」と比べれば短いと言えよう。「土偶木偶」では、時間が経過したことで、転生が行われ、成就することのなかった恋の成就をみている。「太郎坊」には、「土偶木偶」のような幻想性はなく、主人は、現在の細君とのあいだに、平凡ながらも良い家庭を築き上げている。だが、その一方で、過ぎ去った時間は、一種の哀愁を帯びている。次の引用は、主人がある女性に思われたということを、現在の自分の外見に引き付けて語る場面である。

その頃はおれの^{あたま}頭髪もこんなに禿げてはいなかっただろうというものだし、また色も少しは白かったろうというものだ。何ととっても年が年だから今よりはまあ^ま優しかったろうさ、いや何もそう見つともなく無かったからという訳でも無かったろうが、とにかくある娘に思わ

れたのだ。

(「太郎坊」p. 261)

年月の経過は、主人に加齢による外見上の変化をもたらした。これは、主人が、猪口を入手したのが、「二十年も前」(p. 260)であり、現在の妻と結婚してから「かれこれ十五六年になる」(p. 265)と語るように、変化は免れないところである。しかし、この夫婦は、長い結婚生活にありながらも、深い愛情で結ばれている。「太郎坊」では、時間が経過したとて、「土偶木偶」とは異なり、別れた女性と結ばれる訳ではない。しかし、年月の経過ゆえに、自分の外見の老化を笑いながら、細君に過去の女性について語ることが出来るという点では、幸福と言えるだろう。その一方で、女性との再会や過去に戻る事が叶わないがゆえの寂しさが同居しているのである。次の引用は、「太郎坊」の結末である。

主人は庭を見た。一陣の風はさっと起って籠洋燈の火を瞬きさせた。夜の涼しさは座敷に満ちた。

(「太郎坊」p. 266-267)

庭に吹く風は、単なる情景の描写ではなく、主人の内面での動揺や、寂しさと呼応していると思われることが出来るだろう。過ぎ去った時間は、細君との関係の深化の軌跡でもあり、もう当時に戻ることが叶わないと実感させるものでもある。

2.4. 主人の結婚

「太郎坊」で主人は、平凡ではあるが、良い家庭を築いている。だが、先述のように「土偶木偶」とは異なり、過去を想起させるモノと結び付いた女性とは結婚していない。女性との別離は、主人にとっては悲しい過去ではあるが、現在の細君と出会い、幸福な家庭をもっているのも、不幸とは言えない。次のような夫婦の会話からも、夫婦関係の良好さが窺われる。

「アア、酒も良い、^{さかな}下物も良い、お酌はお前だし、^{たいへい}天下泰平という訳だな。アハハハハ。だ
がご馳走^{ちそう}はこれっきりかな。」

「オホホ、^{いや}厭ですネエ、お戯^{ふざけ}謹^{しげやき}なすっては。今鳴焼^{こしら}を拵^{しぎやき}えてあげます。」(「太郎坊」p. 255)

引用では、和やかな雰囲気^{あつまい}の夕餉^{ゆげ}になっており、幸福な家庭の典型例と言えよう。この平凡ながらも幸福な家庭の生成は、主人の細君の果たす役割^{やくわい}が大きい。

なぜならば、細君は、主人から過去に結婚しようと考えていた別の女性についての話を聞かされた後に、「一方ならず同情を主人の身の上に寄せた」(p. 266)とあるように、非常に出来た女性である。主人も陽気な好人物であるが、猪口と結び付いた女性の記憶を語る点では、多少、思慮^{しよ}に欠けると言わざるを得ない。それゆえに、細君の方が、人物が出来ており、良き妻として家庭の生成に寄与^{よき}しているのである。

このように、「土偶木偶」での卜川と転生した女性との結婚とは異なるものの、よき伴侶を得たという点では、「太郎坊」での主人の結婚は、卜川と共通性が見出せるのである。

2.5. モノと伝承、伝達の方法

「太郎坊」では、猪口の由来が、主人の口から語られている。過去の記憶を物象化した猪口が破碎されたことで、口承で個人史の語りが行われたとみなせよう。この主人の語りは、自身の過去を伝えるための「小さな歴史」の伝承と捉えることが出来るだろう。次に引用するのは、主人が猪口にまつわる過去を語り始める場面である。

「ハハハハハ、お前を前に置いて葉ちと言ひ^に苦くい話だがナ。実はあの猪口は、昔^{むかし}おれが若かった時分、今思えば古い、古い、アアもう二十年も前のことだ。おれが思っていた女があったが、ハハハハ、どうもちつと馬鹿らしいようで真面目では話せないが。」と主人は一口飲んで、

「まあいいわ。これもマア、酒に酔ったこの場の坐興で、半分位も虚言^{うそ}を交^まぜて談^{はな}すことだと思つて聞いていてくれ。(後略) (「太郎坊」p. 260-261)

こうして、陽気な主人の過去に、女性との辛い別れがあったことが示されるが、主人の語りでは、肝心の別れた理由については秘匿されたままである。この原因が何であるかは判然としないが、主人が、「冷^{ひや}りとするような突き詰めた考えも発^{おこ}さないではなかった」(p. 263) や、「あの時に無分別をもしなかったことだと悦んでみたり」(p. 264) と語るように、「土偶木偶」での二人のあいだの愛情だけではどうにもならない別れを連想させる。ただ、その理由について主人の口から「それを今更話したところで仕方がない。」(p. 267)、「新しく言葉を費やしたって何になるうか。」(p. 267) と語られるだけである。

この肝心の別れた理由が明かされないという展開には、「土偶木偶」での文殻の軸の裏面に記された数行の文字が何であったのが明かされないことも重なるだろう。ただし、卜川が、記された内容を読もうとしたときに、火災が起きたため、作業が中断したのに対し、主人の語りでは、意図的に別れた理由は語られないという相違がみられる。

また、「土偶木偶」では、伝聞に次ぐ伝聞というかたちで、卜川が結婚に至るまでの逸話が伝承されていた。一方の「太郎坊」では、主人による過去語りを展開する。ここでの伝承は、結婚が破談になるまでの過程が語られており、結婚をゴールとする「土偶木偶」と異なる。だが、声による伝承・伝達が、重要な要素となる点で、この2作は共通するのである。

おわりに

「土偶木偶」と「太郎坊」は、それぞれ文殻と猪口というモノが、前世や過去を想起させると

いう役割を担っていた。一方は、幻想文学であり、他方は、ある夫婦の家庭と主人の過去を描いた物語である。しかし、モノが重要な「アクター」としての役割を果たす物語と見るならば、この2つの物語には、共通したモチーフが描き出されていると言えるだろう¹³⁾。それは、記憶、過去と結び付いたモノと現在との連関、そして恋・結婚の成就、不成就についてである。「太郎坊」は、「土偶木偶」に先行して発表されており、過去の女性との結婚には至らない。この「太郎坊」での結婚の不成就が、「土偶木偶」で成就されたともみなせるだろう。結果がどうであれ、結婚に関する逸話が伝達されていくという展開を含み、「小さな歴史」とモノの対応が見出せるのである。

本論では、モノをめぐる人類学の議論を参照にし、露伴の作品を読み解いてきたが、露伴の作品に描かれる他のモノの象徴性、役割などについて考察することを今後の課題としたい。

註

- 1) 「土偶木偶」の本文は、『露伴全集』第4巻に拠り、「太郎坊」の本文は、『露伴全集』第3巻に拠った。
- 2) 「土偶木偶」については、前掲の須田氏による材源研究が発表されており、その他には、小泉八雲(1850-1904)の『怪談』(1904)中の「お貞のはなし」との類似を指摘するもの(塩谷1965)や、後の「観画談」(1925)、「幻談」(1938)へと流れてゆく「夢幻的な話、不思議な話の系列」と捉えた(牧野2005)、(竹盛2005)などの先行研究がある。なお、「お貞のはなし」については、『嵐が丘』(1847)との比較文学的研究が発表されている(廣野2017)。
- 3) 「太郎坊」の作品内容と掲載紙『新小説』との密接な関係について論じたものとして、(吉成2004)がある。また、吉田大輔氏が、陶器と記憶の関係に注目し、同じく陶器と記憶のモチーフが描かれる室生犀星(1889-1962)の「陶古の女人」(1959)との対比を行っている(吉田2016)。
- 4) 鐘、もしくは鐘の音と「異界」との関わりについては、(笹本2008)を参照。「異界」との関わりは、鐘が、鎮魂のためなどに用いられることから容易に想像されよう。
- 5) 骨董に刻印される時間については、(谷川1998)に詳しい。古道具屋が、「異界」との交流のためのモノをもたらすというモチーフを描いた物語としては、前述の「ミイラの足」などが挙げられる。このように、長い時間を経過したモノが一ヶ所に集積されることで一種の「驚異」をもたらすのである。
- 6) 赤坂憲雄は、異人の種類として、旅人や他所者などを挙げている(赤坂1994)。ト川も旅人であるがゆえに異人性を帯びているのである。
- 7) 裸足のままの道行きには、触覚からの刺激が大きくなる。これは、闇という視覚情報を遮る条件とも関わっている。ト川は、取っ組み合いの末、追手の男に首を絞められ、気絶するなどの体験をしており、夢幻的な状況の中で触覚を刺激されている。露伴の作品に限らず、「異界」と触覚の関連は、検討すべき課題である。
- 8) 闇と「異界」との関連については、(狩野2011)に詳しい。
- 9) 〈贈与〉について的人类学の古典として(モース2009)が挙げられる。
- 10) 『万葉集』における董については、(木下2010)などの研究がある。
- 11) 露伴「遊仙窟」で展開された唐代伝奇『遊仙窟』から『万葉集』への影響については、(井波2009)を参照。ただし、董についての言及がある訳ではない。
- 12) 「太郎坊」は、董の意味であるが、有名な天狗の名でもある。別に主人は、驕り高ぶった人物ではな

いが、湯上がりゆえに紅潮し、加齢によって頭髪が薄くなって「地が透いて赤く」(p.263) になっている。このことから天狗の体色とされる赤のイメージが想起される。しかし、葷と天狗が重ねられているのか否かは、推測の域を出ない。

- 13) モノは人格を持たないが、モノを重要な担い手と捉える考え方として、人類学におけるアクター・ネットワーク論がある。開発や町おこしなどの文脈で援用され、モノを「アクター」とみなす(床呂・河合 2011)。

参考文献

- 赤坂憲雄『異人論序説』筑摩書房、1994年。
井波律子「幸田露伴——その生涯と中国文学」『幸田露伴の世界』井波律子・井上章一編、思文閣出版、2009年。
犬養孝『わたしの万葉百首』(下)、ブティック社、1993年。
小田亮『構造人類学のフィールド』世界思想社、1994年。
狩野敏次『闇のコスモロジー 魂と肉体と死生観』雄山閣、2011年。
神崎宣武『三三九度——盃事の民俗誌』岩波書店、2008年。
木下武司『万葉植物文化誌』八坂書房、2010年。
幸田露伴「太郎坊」『露伴全集』第3巻、岩波書店、1978年。
——「土偶木偶」『露伴全集』第4巻、岩波書店、1978年。
笹本正治『中世の音 近世の音——鐘の音が結ぶ世界』講談社、2008年。
塩谷賛『幸田露伴』上、中央公論社、1965年。
白川静『初期万葉論』中央公論社、2002年。
須野千里「幸田露伴「観画談」「土偶木偶」の材源」『国語国文』75(1)、中央図書出版、2006年。
竹盛天雄「無名指の小さな黒子——『土偶木偶』について」『文学』6(1)、岩波書店、2005年。
谷川渥『形象と時間——美的時間論序説』講談社、1998年。
床呂郁哉・河合香吏「なぜ「もの人類学」なのか？」『もの人類学』床呂郁哉・河合香吏編、京都大学学術出版会、2011年。
橋本和也『観光経験の人類学——みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐる——』世界思想社、2011年。
廣野由美子「ハーンとブロンテ——《怪談・奇談》と『嵐が丘』における言葉の接点」『言葉という謎 英米文学・文化のアポリア』神輿哲也・新野緑・吉川朗子編、大阪教育図書、2017年。
牧野茂「『土偶木偶』小論」『静岡福祉大学紀要』1、静岡福祉大学、2005年。
モース、マルセル『贈与論』吉田禎吾・江川純一訳、筑摩書房、2009年。
吉田大輔「幸田露伴が描く陶器と記憶——「太郎坊」における盃をめぐる——」『待兼山論叢 文学篇』第50号、大阪大学、2016年。
吉成大輔「幸田露伴「太郎坊」成立とその周辺」『緑岡詞林』28、青山学院大学、2004年。